

緒言

織田信長はかつて、もつとわかりやすく説明されていた。

すべての大名が上洛して天下に号令をかけようとしていた戦国時代。信長は、上洛するために尾張国に進軍してきた今川義元を奇襲攻撃で桶狭間に滅ぼすと、自らは美濃国に攻め込み、凡庸な斎藤龍興を追放した。そして越前国から足利義昭を呼び寄せると、「天下布武」を旗印に西上し、たちまち京・畿内を席卷した。

やがて傀儡であることに我慢できなくなった義昭が策略をめぐらしはじめると、信長は数々のピンチを切り抜けて、室町幕府を滅ぼし、一向一揆や武田氏を倒して中世社会を終わらせる。しかし、信長の強権的、独断的な性格が災いして、松永久秀や荒木村重らが次々と裏切る。そして天下統一まであと一歩のところまで、個人的な恨みを募らせた明智光秀によって本能寺で暗殺された、云々。

しかし、近年の研究によって、右の文章の半分は訂正を余儀なくされている。天下人信長をどのように評価するのかは、きわめてわかりにくくなったと言えるだろう。

もちろん実証的な研究によって人物像が訂正され、新しい歴史観が創生されることは好ましい。ただ、信長については、大河ドラマの影響などもあり、怪しげな新史料の「発見」や、史実の表層的な読み替えなども少なくない。

本書の執筆をになった中心グループ(内堀・鈴木・仁木・三宅)は、二〇〇一年から守護所シンポジウム@岐阜研究会を立ち上げ、共同研究をはじめた。二〇〇四年八月にシンポジウム「守護所・戦国城下町を考える」を岐阜で開催し、(第一分冊)「シンポジウム資料集」と(第二分冊)「守護所・戦国城下町集成」を刊行した。また、このシンポジウムをもとにして、内堀・鈴木・仁木・三宅編『守護所と戦国城下町』(高志書院、二〇〇六年)を出版した。

ついで共同研究は、小野などもまじえた新・清須会議実行委員会に継承され、二〇一四年八月、守護所シンポジウム2@清須「新・清須会議」を清須市で開催した。シンポジウムにあたっては資料集を刊行した。

これら二回のシンポジウムでは、いずれも美濃国・尾張国の守護所・戦国城下町を議論の中心にすえつつも、全国の室町・戦国時代の守護所・城館・城下町の事例を収集し、その比較検討によって武家拠点の新しいイメージや理論の提示を試みてきた。考古学をはじめ、文献史、歴史地理学などの研究者による学際的研究を展開し、現在につづく一つの学問的な潮流を形成してきたのである。

本書は、以上のように、二〇年間にわたって共同研究を進めてきた中心グループに、新しいメンバー(小野、石川)も加えて、研究の集大成をはかるものである。

メンバーの大半が岐阜県・愛知県に職場をもっていることから、各論攷は美濃国・尾張国の室町・戦国時代を対象とし、美濃国では長井氏・斎藤氏、尾張国では信長以前の織田氏から分析をはじめ、それが信長の時代にどのような展開してゆくのかを論じることになる。単なる政治過程論、軍略分析ではなく、地域社会の実態を精査することから、その上部構造としての織田信長権力の特質の解明を目指す。

上洛後の信長の時代を描くことをあえて主題とせず、「天下人信長の基礎構造」をタイトルとしたのは、右のような意図からである。

織田信長が成した事績に対する本質的な議論について、本書によって一石を投じたい。

鈴木正貴
仁木 宏

本書の構想段階では、尾張織田氏の政治権力論を下村信博氏（名古屋市蓬左文庫など）に執筆いただく予定であった。しかし、下村氏は体調をくずされ、不帰の客となってしまわれた。下村氏の論攷を加えられなかったのが残念である。